
馬鹿の家庭教師

すももっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿の家庭教師

【Nコード】

N3935K

【作者名】

すももっち

【あらすじ】

馬鹿を網羅したタカトの家庭教師のケンイチ。

馬鹿を連発する短編小説です。

ただ馬鹿が悪いとか良いとか、そういう話ではありません。

「馬鹿」と呼ばれるものは大きく二つに大別される。

一つは「勉強馬鹿」。

文字通り勉強ができない馬鹿だ。

最近なんかじゃテレビで持てはやされているのが、それに当てはまるだろう。

しかしこれは「やる」「やらない」でも大きく違ってくる。

中には「やってもできない」「奴もいるのかもしれないが、俺はまだ一度も見たことはない。

もう一つは「生活馬鹿」。

言葉ではうまく説明できないが、普通に生活している中で「こいつ本当に馬鹿なんじゃないか」と思った時には、きっとこちらに当てはまると思う。

例えばこんな場面。

「おい、外から帰ってきたんだから、手え洗ってこい」

そもそもこの俺の会話の振りからしておかしい。

相手は俺の子供でもなければ弟でもなく、はたまた血縁者でもなければ、すでに赤の他人で、しかも2こしか年の差がない。

しかし俺の言葉は小学生以下に向けたような言葉で、中身は問題ないが外身は高校生そのものである。

「は？別にどこも触ってねえし、汚なくなっただけえもん。ほら」

「……そういう問題じゃない」

「はあ？訳わかんねえ。そーやって細けえからモテねんじゃん？」

「そういう問題じゃない！手ぐらいさつさと洗ってこい！」

馬鹿と言わずして何という、といったところか。

この馬鹿、名前はタカト。

今年受験生で、大学には入りたいらしい。

しかし悲しきかな、タカトは生活馬鹿だけに留まらず、勉強馬鹿も持ち合わせるといふ馬鹿を網羅したような馬鹿なのだ。

俺は今、その馬鹿をただただ金のために教育している。

そう、金のためだ。

大学生というものは何かと入り用なため、金というものはいくらあっても足りない。

そうでなければ赤の他人の教育なんか御免だ。

増してや馬鹿を網羅した馬鹿の教育なんかなおさら御免だ。

しかし金に目が眩んだ俺は、あっさりとそいつの家庭教師を引き受けた。

アルバイトとして割り切れたらまだ良かったのだが、タカトの馬鹿行動にはなかなか目を潰れなかった。

タカトの家はある程度金持ちで、一人っ子のせいもあり、母親から「タカトちゃん」と大切に甘やかされて育った（そのせいで性格はクソ生意気）。

顔がまた整っているものだから、女子からは黙っていてもチャホヤされる（いっそ黙っていてくれた方が嬉しい）。

タカトの環境一つ一つがダメな道、つまり馬鹿の道にたどり着かせてしまったのだ。

今さら俺が口出ししてどうするんだというところまで来てしまっているが、見てみるとイライラするのでつい言うてしまう。

俺も大概お人好しだと思う。

言っただけで言い返されたら余計ストレスが溜まると分かって言うのだから。

「ケンイチー、手洗ったぞー」

そうして胸を張ってふふんと鼻を鳴らすタカトを、やはり馬鹿だと思っ。

外から帰って来て手を洗うのは常識であり、そこら辺の幼稚園児だって出来ることだ。

自分の馬鹿さ加減をもう少し知った方がいい、自分のために。

「…今日化学の小テストがあっただろ」

いちいち言うのも面倒なので、タカトをさっさと勉強机に向かわせる。

金だけはあるこの家、タカトの部屋も勉強机も無駄に大きい。俺の六畳一間のアパートよりも広くて綺麗なタカトの部屋に、最初のころは苛立ちさえ覚えた。

神は二物を与えないとは言いが、まさしくその通りだと思う。

勉強もしない奴にどうしてこんな広い机が必要なのか、あの甘い母親は分かっているのだろうか？

…分かっているからこの状況なのだろうけど。

タカトはその広い勉強机に薄っぺらいサブバックをバンツと置いたまま固まった。

その反応を見ても、馬鹿だなと思う。

素直すぎる反応、それだけで小テストが予定通り行われ、良い点数が取れなかったことを意味している。

「見せる。今さら良い点数なんて期待してない」

「ぐ……！」

タカトが苦しい声を出したが、その口からは何の言葉も出てこなかった。

図星だから言い返せないらしい。

これを可愛いと取るか馬鹿と取るか、俺はまず間違いなく馬鹿と取

る。

タカトは渋々サブバックから無造作に押し込まれたくしゃくしゃの小テストを取り出した。

薄いだけあってサブバックの中には教科書は一冊も入っていない。

それでも小テストを持ち帰って来ただけタカトにしたら偉いだろう（世間一般じゃ当たり前だけど）。

くしゃくしゃのままの小テストをタカトから受け取り、手で簡単に広げて中を見る。

予想の範囲内ではあるが、やはり点数は悪い。

右上に赤いペンで「3 / 20」と書かれている。

ざっと見た感じ一問一点なので、3問しか正解がないということになる。

「…勘か？」

「ち、ちがうつ！」

勉強机の椅子には座らず、近くのベッドへと胡坐をかいて座ったタカトが声を上げた。

代わりに俺がその椅子に座り、体をタカトの方向へと向けたまま小テストを眺め続ける。

「ケンイチが死ぬ気で覚えろって言ったとこだろ？合ってるの」

化学をやるに当たって最低限覚えなければいけないもの、それを覚えなないことには何もできないもの、それは元素記号だ。

なるほど、確かにこの三点は元素記号で稼いでいる。

しかし高校三年生の小テストで「水素の元素記号は？」なんて問題は、先生の優しさの何物でもない。

0点を取らせない、いわばオマケの問題だ。

褒めるべきか馬鹿となじるべきか…。

「…それ以外は白紙か…」

やったところしかできない、それは当然のことかもしれないが、やはり白紙でテストを出すその根性が間違っている。

この答案からはテスト中のタカトの焦りを感じさせなかった。書けなかったら焦れよ。

「だってわかんねえんだもん。考えたってわかんねえんだから、考えるだけ無駄じゃん」

「開き直るな。分かんなくなつて適当に何か書けよ。勘で当たったとしても点数は点数だろうが」

タカトはふーん、と何かを学習したように俺の手の中の小テストを見つめた。

今日は化学をやろう、みつちりと。

そして最後にこれとまったく同じ小テストを抜き打ちでやろう。

馬鹿は馬鹿でもタカトは「やらない」馬鹿だ。

やれば人並みに覚えることもできる。

「ほら、どこ座ってんだ馬鹿。そこで勉強できると思ってたのか」
「馬鹿じゃねえよ！」

いや、お前は馬鹿を網羅した馬鹿だよ。

俺が椅子を譲ってやると、ぶつくさ言いながらもタカトは椅子に座った。

やる気のなさそうなダルダルの学ラン、やる気のなさそうな茶色いワックスのついた髪、やる気があるように見えるのは右耳のキラリと光るピアスのみ。

「化学の教科書、出せ」

「あ？ねえよ、そんなん。ガッコかも」

「かも、じゃなくて学校だろ。明日持って帰ってこい。忘れたら今日と同じように…」

俺は自分の黒い手提げから分厚い問題集を取り出した。

俺が持っている中で一番厚いやつをわざわざ選んで持ってきたのだ。案の定タカトはそれに目を丸くした。

「この問題集の問題を解かなきゃいけなくなるからな」

「は！？マジで言ってるの！？こんなん人間が解けるわけねえじゃん！」

「人間が作った問題が、どうやって人間が解けない問題になるんだ。それに、俺はこの問題集を三回はやった」

「嘘だろ！？やっぱケンイチって頭イっちゃってるの！？」

「…イっちゃってるのはお前だ」

馬鹿の思考回路はいまいち分からない。

その日の最後にやった全く同じ問題の抜き打ち小テストは、「12/30」。

一応進歩らしきものは見られた。

そして答案は白紙でもなくなっていた。

ただ「俺もまだまだだな」と思ったのが、答案用紙に「あいうえお」が書いてあったこと。

「何か書け」と言われたことを鵜呑みにしたタカトは、言葉通り「何か」を書かなければいけないと馬鹿なりに考えたようである。

やはり馬鹿の思考回路は理解に苦しむが、馬鹿の教育はやりがいがありそうだ。

馬鹿には大きく二つに大別される。

「勉強馬鹿」と「生活馬鹿」。

その二つの馬鹿を網羅した馬鹿のタカト。

しかし馬鹿は馬鹿でも素直な馬鹿。

だから馬鹿から脱出させてやろうと俺はあの手この手を使って楽しんでるのだ。

そう、俺はやはり楽しんでるらしい。

そして家庭教師はまだ始まったばかりだ。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

流れのままに書いたものですので、拙い部分があるとは思いますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ケンイチはきつと天才で、タカトは本気の馬鹿だと思います。
しかし馬鹿な子ほど可愛いというでしょ？みたいな…。
でもケンイチも良い奴ですよ、たぶん。

最後まで読んでいただきありがとうございました。
感想・評価いただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935k/>

馬鹿の家庭教師

2010年10月25日09時14分発行